

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 1 日現在

機関番号：32601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21720051

研究課題名（和文）

乱拍子と能の身体

研究課題名（英文） Noh Theater and the Dancing Body

研究代表者

沖本 幸子（OKIMOTO YUKIKO）

青山学院大学・総合文化政策学部・准教授

研究者番号：00508278

研究成果の概要（和文）：

能の舞の成立を考える上で重要な白拍子舞と乱拍子舞の芸態とその展開の様相を明らかにしたことが大きな成果である。特に、これまでほとんど研究されてこなかった乱拍子舞に目を向け、能のルーツであり根本とされる翁猿楽成立への影響を具体的に跡づけた点は大きい。また、中世の身体を考える上で、白拍子舞・乱拍子舞の身体同様重要な風流踊りの身体についての研究にも着手できたのは、予想以上の研究の進展である。

研究成果の概要（英文）：

The *shirabyōshi* and *ranbyōshi* dances are the key to the evolution of medieval Noh drama, but they have received little scholarly attention. The major advance achieved through the research is that I have been able to establish the developmental arc of these dances, and to clarify their influences on the formation of the dance of Noh drama. Furthermore, owing to advances that exceeded my initial expectations for this research period, I was able to expand my research to include the study of “*furyū odori*” dance, essential to a comprehensive understanding of the dancing body during the medieval period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,800,000	1,140,000	4,940,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術誌・芸術一般

キーワード：乱拍子・翁・能・白拍子

## 1. 研究開始当初の背景

中世芸能に対する海外からの関心はもとより極めて高い。特に茶道の「侘び」「さび」や能の「幽玄」など、神秘的かつ深淵な精神性、身体性を持つものとして称揚されてきた。

能楽に限ってみても、リアリズムを志向しないポスト・モダン的な演劇として Peter Brook（英）や Robert Wilson（米）らの現代演劇家に影響を与えてきたし、1980年代以降の代表的な研究だけでも、Thomas Blenman Hare（米）の“Zeami's style”

(1986年)をはじめ、Arthur H. Thornhill(米)の“Six Circles, One Dewdrop: The Religio-Aesthetic World of Komparu Zenchiku”(1993年)、Paul S. Atkins(米)の“Revealed Identity: The Noh Plays of Komparu Zenchiku”(2006年)など、世阿弥に続き、難解といわれる金春禅竹研究も盛んである。

国内では謡曲や世阿弥らの芸論研究が中心であることに変わりはないが、能の舞の成立という観点で言えば、竹本幹夫『観阿弥・世阿弥時代の能楽』(明治書院、1999年)をはじめ、山中玲子『能の演出—その形成と変容』(若草書房、1998年)、三宅晶子『歌舞能の確立と展開』(ぺりかん社、2001年)などにより、現代の能につながる抽象的な舞の成立はほぼ明らかにされたと言ってよい。

一方で、抽象的な舞の成立以前にあった芸能の実態については、ほとんど研究が進んでいないのが現状である。松岡心平『宴の身体』(岩波書店、1991年)は、中世における田楽の熱狂や踊り念仏の存在に触れ、中世文化を身体的なパフォーマンス文化として捉え出した先駆的な研究だが、その熱狂的な身体が具体的にどのように能に影響を与えたかについては明確にされていない。同様に、能の根本であり、最も古い形式を残す「翁」については、様々な議論が積み重ねられてはきたが、その舞の躍動性の根拠や成立過程もまた明らかになってはいない。これは一つには、国内外の研究者の興味が、ポスト・モダン的な、能楽大成後の抽象的、持続的な舞に集中していたことにもよるし、また、能楽形成期の鎌倉時代の芸能史研究がほとんど進んでいなかったことにもよる。

その中で本研究は、報告者が従来から取り組んできた平安末期以降の芸能史研究を元にしながらか、「乱拍子」という躍動的な芸能の登場と、それへの熱狂、展開という新たな観点から中世初期の芸能をめぐる状況を解き明かし、さらに、各種「翁舞」も含めた日本各地に残る民俗芸能の中から、「乱拍子」の展開例と見なされる芸能を新たに捉え出し、それらを比較考察する中で、芸能としての「翁」の成立、「翁」の身体の成立を明らかにしようとしたものである。

「乱拍子」は、従来、「白拍子」の一種、あるいは、「白拍子」と同様のもののように見なされ、しかも、いずれもあいまいなまま扱われてきた。「白拍子」自体の芸態が解明されていなかったためもあるが、報告者のこれまでの研究の中で、「白拍子」と「乱拍子」が同時代に流行した、それぞれ独立した芸能であることが明らかになった。本研究では、そうしたこれまでの報告者の研究を踏まえつつ、「白拍子」の芸態、および、従来の「白拍子」イメージの誤解の源泉を明らかにした

上で、「乱拍子」というこれまでほとんど研究対象にされてこなかった芸能に光を当て、その展開と影響の諸相を明らかにしようとしたものである。文献研究による芸能史的研究を軸にしつつ、各地に残る民俗芸能の中の乱拍子の実態と展開の諸相を跡付け、乱拍子の多様な広がりや重要性を初めて明らかにするという点で画期的であるばかりでなく、これまでほとんど明らかにされてこなかった、能の成立史に新たな、そして、大きな光を当てる可能性も高い。

特に、猿楽の根本とされる「翁」の成立をはじめ、能の形成期における「乱拍子」の重要性が明らかになることで、ともすれば抽象的な舞の持続的、抑制的な身体に目が向きがちな能楽研究の中で、「乱拍子」の持つ野生的な身体—鼓のリズムと掛け合うような、足拍子中心の躍動的でアクロバティックな舞—が能楽成立に果たした役割の大きさについて再考が促されることは間違いない。それはまた、幽玄な能の身体とは異なる、もう一つの能の身体を発見することでもあり、二つの身体性の拮抗の中で生まれた世阿弥時代の能の表現の深さを再発見することにもつながるだろう。

さらに言えば、「翁」の成立を「乱拍子」の展開という観点から考える中で、これまで明らかにされてこなかった猿楽者のルーツや、猿楽者の信仰についても新たな視野が開ける可能性が高いのであり、能楽研究にとっても非常に重要な研究であることは疑いない。

また、近年、中沢新一『精霊の王』(講談社、2003年)のように、禅竹の「翁」論を一つの切り口にしながら、日本の古層の神々の世界を、ドゥルーズなどの西洋思想を読み込む中で明らかにしようという刺激的な試みも出てきたが、本研究は、こうした取り組みを思想史的観点からではなく、芸態史、芸能史の観点から捉え直す可能性を秘めている点でも重要である。

## 2. 研究の目的

日本の中世は、芸能の時代と言われる。能狂言、生け花、茶道など、後に「芸道」と言われ、日本の伝統文化の中核を担う諸芸能が確立した時代でもあるからだ。そしてそこには、「侘び」「さび」、あるいは「幽玄」といった言葉に象徴されるような精神性、身体性が見出され、中世文化の深淵なイメージを作り上げてきた。そうしたイメージが中世文化、そして、日本文化の重要な部分を担ってきたことは疑いもない。しかし一方で、中世には躍動的、熱狂的な身体も存在していた。たとえば、一遍の踊り念仏があり、棧敷崩れの熱狂を引き起こした田楽があり、あるいは、中

世末期の豊国祭礼に象徴される、派手な仮装に身を包んでの熱狂的な「風流」(ふりゅう)踊りの群れがあった。こうした躍動的、熱狂的な身体が、能をはじめとする中世諸芸能の一見抑制的に見える身体とどのように関わり、あるいは、拮抗し、差異化されていったのか。

文献学的研究と各地の民俗芸能、儀礼のフィールドワークを柱にしながら、中世における熱狂的身体の実像と変容をたどる中で、中世芸能の身体について改めて考えること、抑制的に見える身体が抱え持つ熱狂、躍動、狂気を見定めていくことが私の研究の大きな目的である。

その中で本研究は、これまでほとんど研究されることのなかった「乱拍子」という乱舞の芸能に注目し、中世における「乱拍子」への熱狂とその躍動性、そして、それが能楽形成に与えた影響について多角的に考察しようとするものである。

「乱拍子」とは、平安末に登場し広く流行した即興舞で、もともとは鼓のリズムの名称だった。鼓にのっての律動的なリズム、激しい足拍子、「やれことうとう」の囃子詞が特徴で、雅楽の笛の音に沿う連続的なメロディから初めて脱した、不連続で切断的な鼓の「ノリ」が人々を魅了した。

この「乱拍子」の展開と影響という観点から、能の舞の成立、特に能の根本と言われ、猿楽者たちの信仰と深く関わる「翁」の成立について考察し、ひいては、それを支える芸能者の信仰について解く鍵を見出すことが本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

報告者の研究の最大の特色は、精緻な文献学的研究に基づきながらも、絵画資料も視野に入れ、さらに、民俗芸能のフィールドワークや哲学的思考の助けを借りて、できる限り多様なアプローチで、歴史の中からいきいきとした芸能の姿を浮かびあがらせようとしている点にある。

特に、能・狂言などの完成された芸能から考えるのではなく、周縁的な雑芸能の成立と展開の諸相に目を向けて、それらが時代や場により、芸能、リズム、声など多角的に形を変えていく姿を丹念に追いながら、その中で、個々の芸能の与えた衝撃や意味、次なる芸能が成立していくプロセスを見ていこうとする視点に特徴がある。

本研究も、文献研究とフィールドワーク、絵画研究などを用い、できる限り総合的な方法で行おうとしたものである。

### 4. 研究成果

#### (1) 白拍子舞の芸能の解明

論文②において、能の女舞の原型として、能楽研究からも注目されながら、漠然としたイメージで語られることが多く、きちんとした芸能解明がなされていなかった白拍子舞について、『今様之書』を初めとする寺院の延年の白拍子舞の諸記録と『平家物語』『源平盛衰記』などに記された遊女白拍子の芸能、「鶴岡放生会職人歌合」などの遊女白拍子の絵やそこに記された和歌を照らし合わせ、具体的な芸能を解明したことが一つの成果である。

#### (2) 白拍子舞の幸若舞への芸能の継承の解明

論文②において、白拍子舞の芸能分析を踏まえつつ、白拍子舞の系譜上にあるとされ、また、能の「クセ」の成立に直接影響を与えた重要な芸能でありながら、ほとんど具体的な考察がされてこなかった曲舞の一種、幸若舞へと何が継承され、何が新たに創出されてきたのか、文献調査及び、現在に残る幸若舞(福岡の大江地区)のフィールドワークに基づく芸能分析から明らかにした。

#### (3) 白拍子舞の「誤解」の解明

「白拍子」というと、『平家物語』に登場する平清盛の愛人祇王や、源義経の愛人静御前が有名だが、その芸能については、ほとんどの解説書や事典などで「今様(という歌謡)で舞う」とされてきた。しかし、実際は、「白拍子(という歌謡)で舞う」のが正しい。この誤解がなぜ、そしてどのように生じてきたのか。論文①では、この誤解が、あまりにも有名な『平家物語』の祇王の場面に由来することを指摘し、白拍子舞の芸能と照合させることで、祇王が白拍子舞の前座の芸能として今様を歌っていたにすぎないことを明らかにし、そして、物語の中で、祇王が今様しか歌うことを許されなかったことの意味について再考を促した。

#### (4) 乱拍子舞の翁猿楽成立への影響の解明

発表④、図書①において、乱拍子舞が、能のルーツであり、根本でもある「翁」の成立に影響を与えていた可能性について、「翁」の「千歳」の成立をめぐる考察した。

「千歳」の詞章の変化を文献学的に追いながら、「翁」の古形を残すと言われる上鴨川住吉神社の翁舞、黒川能の所伝則の翁など、民俗芸能の「翁」の千歳にも目を向け、詞章と芸能の両面から、乱拍子舞の千歳への影響を明らかにした。

また、この研究から、「翁」の成立を考える上で、三番叟と乱拍子舞の関わりを考えることが重要なことも明らかになった。「翁」の成立について、ほとんど解明されていない

中で、芸能研究の側面から、一つの見通しを示したことは、大きな成果である。

(5) 乱拍子舞の諸民俗芸能への痕跡の解明  
発表②において、奈良県奈良市上深川町に伝わる民俗芸能「題目立」に焦点を当て、乱拍子舞の影響について考察した。

「題目立」は中世に由来する語り芸と言われるが、語り芸の最後に板敷舞台を強く踏み鳴らす「フシヨ舞」という舞がつく。この「フシヨ舞」が、中世の乱拍子舞の系譜をひくものであることを、その詞章や芸能から明らかにし、また、「フシヨ舞」における板敷舞台の重要性を手がかりに、中世の延年などで板敷舞台が成立してくる背景には、延年の花形芸能だった乱拍子舞で、足拍子を鳴らし、聞かせることが重要だったためである可能性を指摘した。

#### (5) 風流踊りの身体研究の開始

中世の熱狂的身体を考える上で、能の成立に繋がる白拍子舞・乱拍子舞と共に重要なものが、盆踊りのルーツでもある風流踊りである。しかも、興味深いことに、能の「翁」の古形を残すと言われる民俗芸能（猿楽や田楽）がある地域には、風流踊り系の盆踊りが継承されていることが多く、冬の舞と、夏の盆踊りがそれぞれ違う意味、役割の芸能として捉えられている。

そこで、能につながる白拍子・乱拍子の身体と共に、風流踊りの身体について、文献や絵画資料、実地調査を開始し、中世芸能の身体の宇宙をより統合的にとらえることができるよう研究に着手した。

発表①では、風流踊りにおける、踊りの力について、風流踊りが行われてきた時と場（盆、雨乞い、桜の樹下）の考察を行い、発表②では、風流踊りが、特に御霊信仰、死者供養儀礼と関わることに注目しながら、そうした死者と自らの身体を通して交わる危険性を乗り越える力としての「風流」（仮装）の役割について、幅広く考察した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 沖本幸子 「遊女白拍子と今様—白拍子舞イメージの形成と『平家物語』」、査読有、『軍記と語り物』47号、2011年3月、pp.30-38

② 沖本幸子 「白拍子舞から幸若舞へ」査読有、『国文学 解釈と鑑賞』74巻9号、2009年10月、pp.138-149

[学会発表] (計4件)

① Yukiko Okimoto, “Death and Festivity in Popular Performing Arts”, Association for Asian Studies, U.S.A. March 23, 2013

② 沖本幸子 「フシヨ舞から見た題目立—中世の乱拍子との関わりから」【招待講演】京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター公開講座「題目立への誘い」2012年10月6日

③ Yukiko Okimoto “The Dancing Body: Furu odorii and the Power of Dance” 【招待講演】 “Power, Status, Space in East Asian Art”, Harvard-Yenching Institute, U.S.A. April 6, 2012

④ 沖本幸子 「乱舞の身体—軍記物語を手がかりに」【招待講演】軍記・語り物研究会「方法としての芸能—芸能から見た軍記物語」、明治大学、2010年7月11日

[図書] (計1件)

① 沖本幸子 「乱拍子変奏—千歳の成立をめぐる」【共著】小林健二編『中世の芸能と文芸』竹林舎、2012年5月、pp.366-386

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

沖本幸子 (OKIMOTO YUKIKO)

青山学院大学・総合文化政策学部・准教授  
研究者番号：508278

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：